

「青年海外協力隊」

山口

YAMAGUCHI Madoka

まどか

PROFILE

兵庫県生まれ。大学卒業後、民間企業勤務を経て、2006年から西宮市で消防士として8年間勤務。昨年6月から青年海外協力隊(防災・災害対策)としてエルサルバドルで活動中。

消防士の経験生かして「備える」を伝える

幼いころから新聞が好きで、紙面を通して異文化に憧れを抱き、また、過酷な状況下で生きる世界の人々に思いをはせていた山口まどかさん。いつか海外で働いてみたい……。そんな思いを抱きつつ、大学卒業後は民間企業に就職した。その2年後、「直接人の役に立つ仕事がしたい」という気持ちから、西宮市消防局に転職し、火災の消火活動や患者の応急処置と搬送、市民への啓発など防災に関するあらゆる業務をこなしてきた。海外への淡い思いが現実の目標になったのは、消防

JICA Volunteer Story

「人のつながりを力に防災を」

13歳のときに阪神・淡路大震災で被災した山口まどかさん。消防士として国内で8年間、緊急時対応の最前線で活躍してきた経験を生かし、はるか太平洋を越えた中米エルサルバドルで今、防災の大切さを伝えている。



士として8年目を迎えた2013年のこと。偶然目にした青年海外協力隊の募集情報の中に、防災の職種を見つけたのだ。こうして昨年6月、「防災・災害対策ボランティア」としてエルサルバドルの地を踏んだ。

配属先は、エルサルバドル中部に位置するサンピセンテ県のサンピセンテ市役所危機管理課だ。この地域では、大雨やハリケーンによる洪水・土砂崩れが度々発生しているほか、町を囲む山々の中には大きな休火山もある。防災体制の強化が重要な課題なのにもかかわらず、住民の多くは「いつ起こるか分からない災害に備えるより、明日の生活が優先」と考えている。また、危機管理課でも実際の災害を経験したことのない職員がほとんどで、「備える」意識は根付いていない。

「阪神・淡路大震災で被災し、消防士としてさまざまな現場を経験してきた私は、災害に対して実際の体験に基づく視点を提供できる立場にあります。職員の研修や講習会などでは、机上の空論ではなく現実に取り得ることとして、知識を伝えています」

防災の第一歩は、人と人とのつながり

配属先での山口さんの役割は、市の防災体制を強化すること、学校や地域で講習会を開くなど、啓発活動を通して人々の防災意識を高めること。だが、日常の業務は、洪水を防ぐための水路掃除や、感染症予防のための殺虫・消毒剤散布、倒木の危険がある樹木の伐採など、現場での作業が大半だ。加えて、乾期には山火事が、雨期には大雨が頻発することから、突発的な被害への対応も多く、肝心の防災啓発活動に専念することが難しい。

それでも、現地の同僚らと共に、業務の合間を縫って地域の学校に向き、ゲーム感覚で遊びながら消火・



a.学校で行った防災の授業。防災教育用のカードで、土砂崩れが起きた場合の対応について教えた  
b.洪水対策のための水路掃除。空き缶から家具まで、ごみのポイ捨ては深刻な都市問題の一つだ  
c.火災で崩れた家屋の調査と再建築。地方都市では、消防士の人数がまだ少ないのが現状だ  
d.勉強会を開いて、同僚たちに雨水計の使い方を指導する山口さん

救出・救護などの基礎を学べる防災訓練プログラムをはじめとする啓発を実施している。「同僚の中には、必ずしも防災が専門ではない職員もいます。子ども相手とは言葉、最初は教えることにプレッシャーを感じていた彼らも、徐々に「ここはこんな風に変えたら、もっと分かりやすくなるんじゃないか」などと提案してくれるようになりました」。

変化の背景には、普段から時間を見つけて数人で防災に関する勉強会を開くなど、現地職員のスキルアップを目指して、できることから取り組んできた山口さんの努力がある。現在は学校での活動に加え、市民で構成される地域の防災委員会を対象に、応急処置の講習会を開くことを目標として同僚と準備を進めている。積極的な現在とは対照的に、「赴任当初は心が折れかけました」と山口さん。悪臭に耐えながらのごみ掃除や、汚水にわくボウフラの処理、夜通しの警備など、衛生面・体力面ともに厳しい仕事で、心身ともに疲弊していた。それでも乗り切れたのは、「この国の現状と求められる防災を理解したい、同僚と信頼関係を築きたい」と思ったからだ。あらゆる業務を共にこなす中で、同僚たちの性格や得意不得意が分かるようになり、彼らも山口さんを理解してくれるようになった。

そんな経験をした山口さんは、自身について、「今は防災活動の第一歩を達成したところでです」と話す。それは、「日常からの良好な人間関係づくりが防災の基本だ」という山口さんの信条を表す言葉だ。災害時には、目に見えない人と人とのつながりが命を救う。だからこそ、山口さんはどんな活動でも市役所や関係機関、学校、コミュニティなどとの間の連携や関係づくりを大切にしている。「活動2年目のこれからは、信頼という土台の上に、備える意識の定着を図っていきたいと思います」と山口さんは力強く語った。



同僚と共に倒木の危険のある木を伐採しに行く山口さん(左)